

疑いもないことだが、ロシアの哲学と文学に対するシェリングの影響は存在する。その中でも、ドストエフスキーとドイツ文学との結びつきに関する問題は特徴的である。

ドストエフスキーの創作とシェリングの哲学的遺産との比較は様々な方向性において可能である。シェリングの芸術哲学とロシアの作家（**Стаммлер** も含める）の美学的観点と比較することは可能である。我々には、シェリングの《人間的自由の本質に関する哲学的研究》（1809）と作家の理念の結びつきはパースペクティブを持ったものである。我々にはこのドイツの哲学者の最も重要な作品がドストエフスキーに読まれたという直接的な証拠はないが、疑いもなく作家の知り合いとシェリングの哲学的システムとの関連性は存在する。**Чермак** の寄宿学校で、シェリングの研究者である **И.И.Давыдов** は、文学講義を読んだ。後になって作家は、ドイツの哲学者を良く知っていたアポロン・グリゴリエフや **Н.Н.Стравов** と交流している。**Н.Н.Стравов** はドストエフスキーが楽しそうに彼らと哲学的なテーマについて話し合っていたことを証言している。

シェリングの哲学的論文の中ではカントを発展させた思想が深く詳細に研究されており、自由のカテゴリーがそれと結びついている。シェリングの論文における、これらのカテゴリーとドストエフスキーにおける芸術的な具体化との比較を私は今回の論文の課題にしようと思う。

シェリングによる悪のカテゴリーの論文は歴史において哲学的な意味と同様に宗教的な意味を秘めている。悪の性質の理解において二つの極端さが指摘されている：善のカテゴリーと同様の自己の基盤を持つ永遠の悪の告白と、それとは反対の偶然性としてのその決定である。最初の極端さは《二元的な》宗教と呼ばれるものに固有の特性—ゾロアスター、仏教、マニ教などである。この観点によると、悪はその性質において善と同様の力を有していることになる（**Афра=マзда**と**アーリマン**）。二つ目の観点は、特にソクラテスに表現されたものだが、悪の中に無知の結果を見ており、特にルソーが啓蒙の行為者と見られている。ルソーに同意するならば、悪はその本質においても（自然的な本質の崇拜）、その人間においても（善の性質を持った人間）基盤を持ってはいない。カントは自分の論文に《人間本質における原初からの悪について》という表題をつけており、この見出しはルソーとの関係において論争的である。個々の人間的な本質を哲学者は単に悪いものとも、弱いものとも見なしてはおらず、彼は人間の本質を《文字通りの意味での悪》と捉える事に反対していた。

ドストエフスキーの多くの登場人物は、善と悪の体験の道を探しており、広大さが特有のものである（スヴィドリガイロフ、ロゴジン、ミーチャ・カラマゾフ）。広大さは自らの可能性の果てしの無さと結びついており、特定の目的が不在している中で、分別の無さや、善と悪の区別が存在しないという告白にたどり着くのである。そしてこのことは、ドストエフスキーにおいては善と悪が同じ根幹を持っていることの証明でもある。

この発現は特に《カラマゾフの兄弟》において明らかである。この小説はカラマゾフ性の克服である。；この小説における悪の克服の問題は最も重要なものの1つである。

ミーチャとの会話の中でアリョーシャは指摘している：《しょせん同じ階段に立っているんですよ。僕は一番下の段だし、兄さんはもっと上の、どこか13段目あたりにいるってわけです。》（14, 101）この言葉の中で強調されているのはカラマゾフの家族の同一性であり、善と悪の同一性である。《ある家族の歴史》（著者が小説の第1篇に名づけた）においては、ドストエフスキーの考えによると全ロシアの歴史や、それにも増して世界全てが表現されており、作家の最終的な小説の主要な思想のひとつは、人間の歴史的運命の同一性と人間の本質の同一性に関するものだった。

ミーチャはアリョーシャに対して自分の《広大さ》と《2つの深淵》と、以下に彼がその深淵に《頭からまっさかさま》に落ちたかということについて語っている：《だから、ほかならぬそうした恥辱の中で、突然俺は賛歌を歌いはじめる。呪われてもかまわない、低劣で卑しくてもかまわないが、そんな俺にも神のまとっている衣の裾に接吻させてほしいんだ。一方では同時に悪魔にこのこつて行くようなこの俺でも、やはり神の子なんだし、神を愛してそれなしにはこの世界が存在も成立もしないような愛を感じているんだよ。》（14, 99）彼は無関心というわけではなく、彼の善と悪に対する関係は相対主義とは関係がない。二つの深淵は彼にとっては同義的なものではない、というのも低劣な深淵に落ちながらにして、彼は高い深淵と絶交しているというわけではなく、それは以前と同じように彼にとっては理想である。しかし低劣な深淵であるのは理想ではなく、その原因は一美である。ドストエフスキーはここで、ブルジョワ社会においては倫理と美学の評価のあいだの相違が特徴付けられていることに関心を集中している。高い深淵は全社会的（理想的には全人類的）に位置づけられているのに対して、低い深淵は個人主義に対して位置づけをされている。それゆえにミーチャにとって、道徳的モラルの破壊は、美のように社会の足かせから解き放たれるように感じられるのだ。《美か！そのうえ、俺が我慢できないのは、高潔な心と高い知性とを供えた人間が、マドンナの理想から出発しながら、最後はソドムの理想に堕しちまうことなんだ。それよりもっと恐ろしいのは、こころにすでにソドムの理想を抱く人間が、マドンナの理想をも否定せず、その理想に心を燃やす、それも本当に、清純な青春時代のように、本当に心を燃やすことだ。いや、人間は広いよ、広すぎるくらいだ。俺ならもっと縮めたいね。何がどうなんだか、わかりやしない。そうなんだよ！理性には恥辱と映るものも、心にはまったくの美と映るんだからな。ソドムに

美があるのだろうか？本当を言うと、大多数の人間にとっては、ソドムの中にこそ美が存在しているんだよ—お前はこの秘密を知っていたか、どうだい？こわいのはね、美が単に恐ろしいだけでなく、神秘的なものですらあるってことなんだ。そこでは悪魔と神が戦い、その戦場がつまり人間の心なんだよ。》（14、100）ミーチャに流れ込んでいる2つの深淵はここではマドンナの理想とソドムの理想として概念付けられている。母から子供への献身的な愛情は、完全なる自己犠牲であり、その愛は返礼を求めず、母性の気高さは、ここでは低劣な浴場と対置されていて、そのために個人的な感覚におけるエゴイスティックな負荷、他者に対する冷淡さが特性づけられている。ドストエフスキーは、友情の権化であり、人々とエゴイズムとの相互理解のように2つの極端な点を位置づけた。ブルジョワ社会のために、美学的な評価の、倫理的な、さらには道徳的なモラルの破壊からの分離が特徴付けられている。（犯罪、殺人、人格に対する暴力、放蕩など）それは大衆の意識にとっては美学的に魅力なものだ。（「大衆文化」がそのことを証明している）まさしくこの法則性、倫理的評価からの美学的な評価の分離を指摘したのが、興奮したモノローグの中でのドストエフスキーの登場人物である。作家はある場合には、キルケゴールやニーチェが哲学において発見した法則性を同様に表現している。ドストエフスキーにとっては、罪人の魂と聖人の魂は近しいものである。このことから、その犯罪がどれほど大きなものだったとしても、救済されるということの重要性が導き出される。

どうやら、シェリングとドストエフスキーの比較分析はその疑いない近似性を証明するものである。そしてこの近似性の説明には、主観的な、そして客観的な原因が存在する。主観的なもの—これは大変に信頼できる作家とシェリングの思想とのつながりであり、客観的なもの—これはその結果において同様の類似性を生み出したドイツの古典的哲学とロシアの古典的な哲学の類似性の問題である。

Б.Н.Белопольский. Достоевский и Шеллинг // сборник. ред. коллегия: В.Г. Базанов (гл. ред.) и др. Достоевский Материалы и исследования том8. Ленинград. Изд-во Наука. 1974-. С.39-51.